

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

ねはんえ
涅槃会

平成28年2月第2週放送

二月十五日はお釈迦さまのご命日^{めいにち}です。多くの曹洞宗寺院では二月に入ると、お釈迦さまのご臨終^{りんじゆう}の場面^{えが}を描いた涅槃図^{ねはんず}を掲げます。そして、今に伝わるお釈迦さまの最期^{さいご}の教えを説いたお経^{こいとく}をととなえ、その御遺徳^{しの}をお偲びします。

掲げられた涅槃図^{ねはんず}を見てみますと、真っ白^{さらそうじゆ}に変色^{もと}した沙羅双樹の下で、お釈迦さまは、頭を北に右脇を下にして、西向きに体を横たえていらっしゃいます。

縁^{えん}を結んだ人々のみならず、さまざまな動植物に囲まれて、まさに旅立たんとするお釈迦さまは、最期の力を振り絞って、悲しみに打ちひしがれそうになっている者たちに語りかけます。

「この世の全てのものは一瞬^{いつしゆん}も留まることなく移り変わっていくものであり、私はそのことわりに従って逝^ゆくにすぎない。これからは自ら^{みすか}を抛^より所としてそれぞれの生涯^{まっと}を全^まうして行って欲しい。その歩みに際して、私の語った教えが抛り所となるはずである……。」と。

一見^{いっけん}、周囲の者たちを突き放したようにも聞こえますが、お釈迦さまは、まず現実をしっかりと見据えよとおっしゃいます。そして同時に自らの残した教え^{もと}に基づいて生きていく限り、お釈迦さまはこれからも共に歩み続けていく存在なのだと語りいらっしゃるので。その最期^{もと}を看取^{みと}らんとしていた者たちにとっては、どれ程、力づけられたことでしょうか。仏教ではこのみ教えに従って歩いていくことを**仏道**、**仏様**の示された道と申します。

皆さんは、身近にいる大切な方を送るための祭壇^{さいだん}をご覧になったことがあるでしょうか。上の段をそっと見上げたとき、そこには真っ白^{いっつい}一對の飾り花が供えられていませんか？お釈迦さまがかつて体を横たえていた沙羅双樹^{さらそうじゆ}を模^もしたものです。

その下に横たわっている大切な方は、二千五百年前のお釈迦さまの臨終の姿に重ねられるのです。私たちにはもう決して語りかけてくれることのないそのお姿^まを目のあたりにしたとき、そこにその方と共に過ごした思い出の場面場面や、交わされた言葉が心に沸きあがってきます。お釈迦さまの言葉のように、私たちに語りかけてきます。それは今までも、またこれからも、きっと私たちを支え続けてくれるはずです。

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

涅槃会とは、お釈迦さまの最期の教えを通して、亡き方々の姿に思いを馳^はせる機会でもあります。私たちの足元の、今の歩みを確かなものとする、そんなひと時でもありたいものです。

— 終 —